

目 次

情報リテラシー支援の取り組みについて (逸村 裕)	1
医学部分館の情報リテラシー教育支援	3
生命農学図書室における新たな取り組み	5
伊藤圭介生誕200年記念展示会・講演会を 終えて(秋山晶則)	7
6年目の電子図書館見学ツアー (蒲生英博)	9
米国のローライブラリーを訪問して (森 由香).....	11



No.150

2004. 2. 15

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/kanto/>

情報リテラシー支援の取り組みについて

逸 村 裕

1. Information literacyと情報リテラシー

米国において「Information literacy」という語が登場して30年が経過した。当初から1980年代にかけてはInformation literacyとは何であるかの議論が行われ、1990年代に入ると、Information literacyの必要性を踏まえ、それがどのような要素から成り、習得のため何をどのように学び、またどう指導するべきかが論じられた。インターネットが急速に普及し、デジタル・デバイスと併せ、教育での問題が顕在化した。

2003年9月、7大陸23カ国からの代表が集まり、チェコのプラハで開催された“Information Literacy Meeting of Experts”でプラハ宣言が表明された。そこでは「Information Literacyは生涯学習における基本的権利であり、情報を同定し、見つけ出し、評価し、組織化し、効果的に創造し、利用し、コミュニケーションする能力と知識」⁽¹⁾としている。

2. 日本における情報リテラシー

日本では情報リテラシーの歴史は比較的新しい。文部省の施策は1986年臨時教育審議会第二次答申に始まる。ここでは将来の高度情報社会に生きるのに必要な「新しい資質」を「情報活用能力(情報リテラシー)」として定義づけ、

「読み、書き、算盤」と並ぶ基礎基本として、学校教育においてその育成を図ることを提言した。ここに始まる流れは2003年度から高校必修教科「情報」が開始されることに結実する。

3. 大学図書館と情報リテラシー

大学図書館では早くから「図書館利用者教育」または「図書館利用指導」として取り上げられてきた。その名称と内容に変遷はあり1930年代の東京帝国大学附属図書館にも記載がある。新制大学においては、「図書館と資料の使い方」を中心に参考業務の一部として早くから採り入れられて来た。1970年代からは独立業務として「新入生向け」そして「レポート・卒論執筆作成のために」が多様な形で行われた。インターネットの普及とネットワーク情報源を取り込んだ成果が2003年にハンドブックとしてまとめられている⁽²⁾。ここでは目標として「印象づけ、サービス案内、情報探索法指導、情報整理法指導、情報表現法指導」の5領域を挙げている。

4. 名古屋大学全学教育科目「基礎セミナー」での実践

筆者は2003年度後期、全学教育科目「基礎セミナーB」を担当した。これは「1年生を対象

として全学の教官が担当し、理系と文系の学生が同じ少人数のセミナーに参加しながら、学問研究の基礎として必要な「読み」(文献調査や資料の収集およびその考察)、「書き」(資料や考察結果のまとめ、図示、報告書の作成)、「話」(発表と討論)の方法を通じて、学問的知識の探究のプロセスとその面白さを体験し、自立的な学習能力を育成すること」を目標としている。

本セミナーでは、大学図書館での情報リテラシー教育支援のため、「図書館情報リテラシーを身につける」を授業目的とし、情報リテラシー教育とプレゼンテーション指導を行っている。授業計画を表1に示す。

授業は中央図書館4階サテライトラボを用い⁽³⁾、修士2年TAが1名ついている。

教材として毎回Power pointを用意し、印刷資料を配布し、ビデオ「新・図書館の達人シリーズ」を用い、関係する概念と用語の理解確認に努めた。

授業では計画当初から附属図書館参考調査掛の援助を受けている。特に授業項目5では実際にレファレンス資料と情報検索用DBの説明に関して演習のサポートを受けた。セミナーではほぼ毎回小テストを行い、小レポートを4回実施した。また「中央図書館利用案内」評価も行った。

表1 基礎セミナーB授業計画

1. 情報とは 学術情報 質の保証された情報
2. データ 情報 知識
3. 大学図書館の役割 中央図書館利用案内評価
4. プレゼンテーション 自己紹介・自分の好きなもの
5. 各種情報源を探す 目録 雑誌記事を探す レファレンス資料 抄録と索引 一次資料と二次資料 電子ジャーナル
6. 出版流通 本と雑誌の将来像 グループプレゼンテーション

5. 現時点での評価

本稿執筆時点で3回の授業とレポート2本の作成を残している。また、最終回には学生とTAによる「授業評価」が行われる予定である。セミナーに関しての現時点での印象を記す。

- (1) 受講者12名は学部1年生であり、その学部も文学・情報文化・経済・工学と多岐にわたり、共通する主題関心を捕捉するのが難しい。
- (2) 図書館使用経験、情報機器活用能力に差異が見られ、この対応に授業の前半を費やした。第1回の授業で得た図書館使用状況に関する結果を表2に記す。

表2 図書館使用状況 人数 n=12

図書館使用頻度	
週2 - 3回	2
週1回	6
月に数回	3
ほとんど使わない	1
図書館使用理由	
本を借りる	10
時間つぶし	10
勉強場所として	9
調べもの	8
コピーをとる	6
グループ学習室を使う	5
待ち合わせ	5
読書	5
雑誌を見る	5
新聞を見る	4
図書館員に質問するため	4
OPAC使用経験あり	10
図書館HP使用経験あり	6
HPからDBを使用経験あり	3
図書館利用案内を読んだ	5

情報機器使用状況についても調べた。学生全員が携帯電話を持つ。PCでは文書・数表作成、ネットサーフィン、ゲームを全員が行っており、HTMLを11名、プログラミングを8名が行っていた。Power pointは9名が使用していた。Power point 未修者にはTAと共に補講を行い、全員に習得させた。

- (3) 資料を探すための課題を各種行った。その過程および結果からするとサーチエンジン使用

については手馴れた学生が多い。その特徴として、短時間で多くのtacticsを行う傾向が見られる。すなわち、よい結果が得られなければ、すぐにキーワードを変え、次の探索に移る。また、結果評価についても見切りが早い。「(Googleの)ヒット件数は見ない。なぜなら、精度の高い情報は上位に出てくるから」とGoogleの特性を意識した探索を経験的に行っているようである。

(4) 探索手段については引き出しが少ない。情報機器使用能力は概して高いが、習い覚えた方法に執着する傾向がみられる。

6. 今後の展望

現代は自己責任の時代である、といわれる。その前提には自己判断が必要であり、またきちんとした情報収集と組織化そして発現が必要である。本セミナー実施は、現時点では学生全体のごく一部を対象とした限られた時間による結

果である。今後、より多くの事例を踏まえ、e-Learningの活用も視野に入れた活動を行っていく所存である。

授業に参加した学生、TAそして援助いただいた図書館職員の皆さんに感謝の意を表する。

注・参照

(1) <http://www.nclis.gov/libinter/infolitconf&meet/post-infolitconf&meet/post-infolitconf&meet.html>

(2) 日本図書館協会図書館利用教育委員会編. 図書館利用教育ハンドブック 大学図書館版. 東京、日本図書館協会. 2003. ISBN4-8204-0230-7

(3) この授業は全学的に木曜5限を指定されている。中央図書館は毎月第4木曜が書架整理日のため、この週は通常教室で行っている。

(いつむら・ひろし 附属図書館研究開発室助教授)

XX

医学部分館の情報リテラシー教育支援

附属図書館医学部分館

1. 沿革

名古屋大学大学院医学系研究科では、1985年度より情報リテラシー教育を目的とした科目が設置されている。科目名は数回変更されているが、現在の名称は「大学院「基盤医科学実習」：文献検索」であり、単位として認定されるのは0.5単位分である。本実習の責任者は附属図書館医学部分館長であるが、文献検索は図書館職員の本分であることから、発足時より例年、協力者として貢献し続けてきた。

本稿では、医学部分館における取り組みを紹介するために、2003年6月下旬に実施された実習の様子を報告する。

2. 2003年度の実施状況

2.1 受講者

予定された受講者数100名に対し181名の受講希望があり、全員の履修登録を認めた。実習及

びレポート評価により、最終的に分館長が単位を認定した受講者は120名であった。

2.2 「基盤医科学実習」：文献検索の概要

本実習の目的は、情報要求に適合する一次資料を入手するための手段として、二次資料データベースの検索技法や、一次資料へのアクセス技法を習得することである。

このような目的のためには、講義と検索実習を同時に実施する方法が望ましい。しかし受講者が多数の場合は実習担当者の負担が過大となる。特に2003年度は過去最高の181名を記録したことから、分離する方式を余儀なくされた。

2.3 講義

6月24日の午後に、履修登録者全員を対象に実施した。講義の対象は、医中誌WEB、

MEDLINE、EBMR、PubMed、ISI Journal Citation Reportsといった、医学研究や臨床に有用とされるデータベースである。4名の職員が担当した。

まずウォーミングアップとして名古屋大学で入手可能な資料へのアクセス方法(名大OPAC、電子ジャーナルなど)について紹介した。その後、前述したデータベースの解説と、検索手法の説明を行い、実例を用いてデータベース検索を実演した。

2.4 検索実習

6月25~27、30日の午後に、計4コマ開講し、各人はそのうちの1回を出席することとした。検索実習はLANに接続されたPCが設置されている情報メディア教育センターのサテライトラボ(鶴舞キャンパス、収容人員52名)で実施した。

受講者には各自「検索テーマ」を日本語と英語で用意しておくよう予め通知しておき、そのテーマに従って検索をしてもらい、常時4名の職員が個別に助言を行った。(【写真：検索実習】を参照)



検索実習

3. 本実習の評価

実習終了後にアンケートの記入をお願いしたところ、受講者全員の協力が得られた。

「内容は十分でしたか」という質問に対し、「講義」については94.2%が、「検索実習」については91.9%が「十分」と回答していることから、実習は概ね好評であったと言える。なお

「内容が不十分」と回答した理由としては、そのデータベースが「自分の研究に必要なではないから」という回答が多数であった。また、内容が「難しすぎた」という意見と「簡単すぎた」という正反対の意見が混在しており、受講者の要望が様々であることを認識させられた。このことから、受講者の多様なニーズへの対応が今後の課題といえよう。

4. まとめ

1985年の発足時には8名であった受講希望者は増加し続けており、2003年度には181名に達した(【図：受講希望者数等の推移】を参照)。増加に伴い、各受講者への密な対応が困難になるなどの弊害が生じている。また、協力者から「有用なデータベースの増加により、実習内容が複雑化している。できれば内容を絞り込みたい」などの意見が出ており、検討課題となっている。

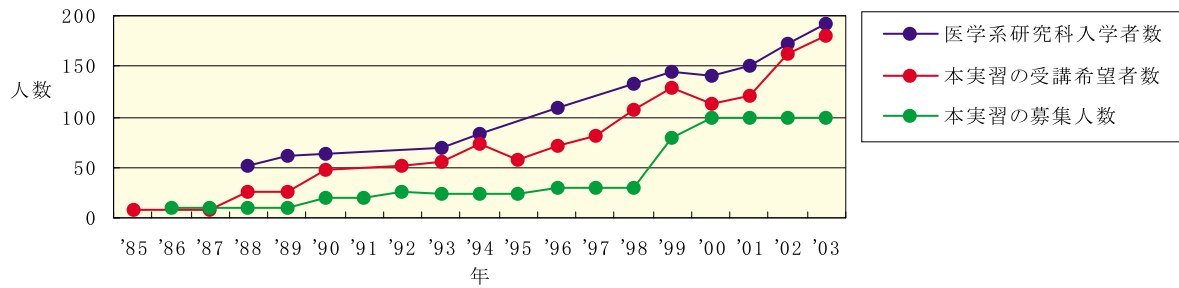
初年度から現在までに、文献検索における情報源であるデータベースは、冊子体からCD-ROM、コンピュータ・ネットワーク型へと様々な形態が登場し、検索の技法も変化した。しかし、医学研究や臨床への応用を目的とした文献検索の重要性に変わりはない。当館の職員としては、今後も日々のサービス向上に努めるとともに、より満足度の高い実習の支援を目指したい。

最後に、本稿の作成にあたって、本実習の責任者である山内一信教授にお世話になった。ここに感謝の意を表したい。

【注】

- (1) 2003年度の協力者は次の6名である。
平井芳美・鈴木康生・石田康博・安井裕美子・山川幸恵・平田沙矢香
- (2) 以下の年度に関しては、数値が不明のため補完してプロットした。
 - ・医学系研究科入学者数：'85-'87、'91-'92、'95、'97
 - ・受講希望者数：'86、'91
 - ・本実習の募集人数：'85

(文責 安井裕美子)



受講希望者数等の推移



生命農学図書室における新たな取り組み 「情報メディア」の授業への参加

生命農学図書室

(はじめに)

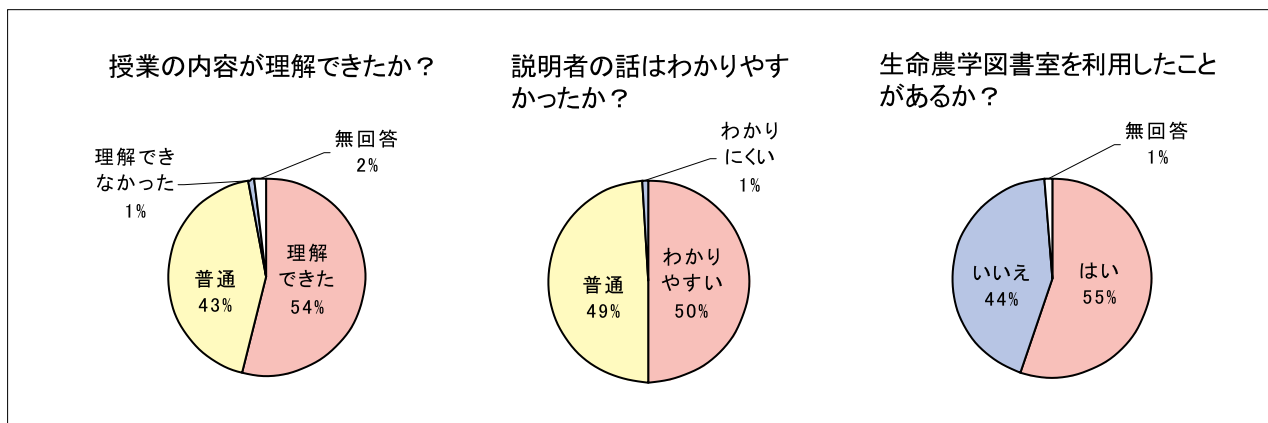
農学部では、今年度に学部1年生全員が前期に受講する「情報メディア」の授業を開講しました。これは昨年度の農学部情報処理委員会で開講が決定され、それ以後教官・技官と共に図書室が協力して何度も検討を重ねてきたものです。授業の内容は、サテライトラボの利用方法、情報の概念、コンピュータやネットワークの仕組み、プレゼンテーション実習としてPowerPoint資料を作成してのグループ発表、図書館情報の検索で、その説明は全体を通してPowerPointで行いました。

この最後の1コマである図書館情報の検索が図書室の担当です。図書室としては、毎年新学期の初めに図書室の利用方法や論文検索のガイダンスを開催してきました。参加希望者に指定時間に集合してもらい、利用者用パソコンを使っての説明などを行っていましたが、ポスターを貼ったりピラを配ったりしてPRに努めながらも、なかなか参加者が集まらない時もありました。今回のようにカリキュラムに組み込まれた必修科目の1コマで説明・実習を行ったことは、図書室としても画期的な取り組みでした。そのため、図書室全員で内容について何度も検討し、PowerPoint資料を準備しました。1年生が対象なので、役に立つ図書室をアピールすることを第一目標とし、写真や図を多く取り入れたPowerPoint資料を作成しました。

(実施内容)

図書室担当の授業は、7月17日に実施しました。今年度の受講対象者は183名で、全員が1台ずつパソコンを操作できるように、木曜日の3限目、4限目に、サテライトラボ(パソコン台数55台)、実験室(パソコン台数52台)の2部屋で同時進行の授業を行いました。90分の授業を次のように4つの内容に絞って説明しました。

1. 生命農学図書室の利用方法
図書室の利用方法、ホームページ、図書室マップと場所の写真を組み合わせたの図書室案内
2. 図書・雑誌の探し方
名大所蔵の図書や雑誌を探すためのOPACの検索方法、NACSIS-Webcat、電子ジャーナルの説明、及び、OPACとNACSIS-Webcatの検索練習問題を配布し、実習
3. 論文や記事の探し方
雑誌記事索引の検索方法、新聞記事の探し方
4. インターネットで利用できる、興味深い電子図書館の紹介
例えば、名古屋大学古書は語る、長崎大学グラバー図譜、食品成分データベース、青空文庫など



(アンケート結果)

授業実施の際、アンケートを全員に配布しましたが、回答者は162人で回答率は89%でした。アンケートの一部を上にも円グラフで紹介しします。

受講生は4月から「情報メディア」の授業を通して、パソコン操作などについて学んできたので、図書室担当の授業の時には、大部分の人がパソコン操作、インターネット検索に慣れていて、OPAC検索などの実習もスムーズに進みました。そのせいもあってか、アンケートからは理解できた、わかりやすいという回答が多く、実施した効果があったと思います。しかし、生命農学図書室の利用については、1年生は大半の授業が共通教育棟で行われるので、離れた位置にある生命農学図書室はあまり利用していないだろうと予想していた通りだったので、今後PRの必要を感じました。アンケートの最後に自由に感想を記入してもらいましたが、特に電子図書館について紹介したことに対して、とて

も好評でした。また、4月の初めに行ってほしかったという要望が多く、図書室としても慣れてもらうためにも早い時期に行う必要性を感じました。他には、検索実習の際一斉にOPAC検索をしたためなかなか検索結果が表示されなかったという指摘も受けましたので、グループ分けした上での実習などの対応を検討していきたいです。

(最後に)

農学部で、一度に50人程の学生を前に図書館情報リテラシーについて説明・実習を行える環境が整ったことはたいへんな進歩でした。カリキュラムに組み込まれた必修科目の1コマに参加することができ、図書室の評価としては、初年度の取り組みとしては成功だったと思います。ただし、必修科目の場合、自発的に参加を希望した相手ではないので、授業の内容をより一層興味深く、質を高くしていく必要性を強く感じました。この「情報メディア」の授業は農学部の情報リテラシーの一環なので、図書室だけではなく、教官、技官の方々と一緒に検討しながら、更に充実したものにしていきたいと考えています。

【注】

授業で使ったPowerPoint資料は生命農学図書室ホームページ (<http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/library/lecture.pdf>) でみることができます。



サテライトラボの授業風景

(文責 夏目弥生子)

伊藤圭介生誕200年記念展示会・講演会を終えて

秋山 晶 則

1. 企画の趣旨

わが国近代植物学の礎を築いた伊藤圭介（1803-1901）の生誕200年にあたり、名古屋大学附属図書館及び同研究開発室では、愛知県教育委員会及び名古屋市教育委員会の後援をえて、記念展「錦窠（きんか）図譜の世界 幕末・明治の博物誌」（2003年10月17日～30日）を開催した（錦窠は圭介の号）。

伊藤圭介は、1803年（享和3）名古屋に生まれ、長崎に遊学してシーボルトに師事したのち、『泰西本草名疏』出版（1829年）により、初めて我が国に近代的植物分類法を紹介するなど、近代科学を切り拓くうえで先駆的な役割を果たした人物である。今日に伝わる雄しべ、雌しべ、花粉などの植物用語を創案したことで知られる。また、蘭方医として尾張藩で洋学教育を主導したほか、維新後は、小石川植物園に関係し、東京大学教授をつとめ、日本初の理学博士ともなっている。享年99歳でその生涯をとじるまで学究生活を続け、多数の著作とともに膨大な資料稿本を遺した。

その主要なコレクションの一つが、名古屋大学附属図書館所蔵「伊藤圭介文庫」である。これは、かつて圭介が、名古屋大学医学部の前身

である仮医学校・仮病院設立（1871年）に寄与したことを機縁として、1955年、孫の伊藤一郎氏から附属図書館に寄贈されたものである（伊藤圭介の遺稿は、名大以外に国会図書館、東山植物園等に分散所蔵されている。それぞれの伝来ルート及び国会本の内容については、磯野直秀「伊藤圭介編著『植物図説雑纂』について」『参考書誌研究』59号、2003年、に詳しい）。

今回の企画は、この伊藤圭介文庫そのものに初めて本格的な光をあて、その内容を広く紹介するとともに、今後の活用にむけた共通の土台を確保することをねらいとしたものであった。

2. 文庫の調査とその成果

というのも、伊藤圭介文庫は、従来から科学史関連の研究書等で注目を集めており、附属図書館でも、科学研究費補助金等をうけ、資料のデジタル化とホームページ上での画像公開を行ってきたが、それ以上の包括的な調査研究はなされておらず、正確な内容把握が困難であったからである。

こうした状態は、高度な資料提供を実現するうえで克服すべき課題であり、今回の企画を呼び水として、まずは資料全体の概要を把握する



展 示 会



講 演 会

とともに、さらに資料を縦覧調査し、メタデータを作成のうえ、電子図書館機能を用いて、伊藤圭介の構築した「錦窠図譜の世界」に迫ろうと考えたのである。具体的には、附属図書館及び同研究開発室から構成される実行委員会のもとに、学内外の専門家にも参加いただいてワーキング・グループ(WG)を設置し、WGと連携しながら研究開発室が中心となって調査を開始した。

当初は、相当癖のある圭介の筆跡に悩まされたが、植物を中心に、動物、昆虫など、自然と人間のかかわりについて、時代をこえ、洋の東西を問わず博搜された資料世界は、大変興味深いものであった(全国各地の詳細な方言記録なども貴重)。また、入手した各種資料や手紙等の「現物」も多数貼り込まれており、今では失われてしまった書物の断簡なども相当数含まれることから、当時の文化世界を凝縮した「宝箱」であるという印象を強く持つに至った。

このほか、アーネスト・サトウら来日外国人と圭介の密接な交流を示す記録や、従来、圭介自筆の博物図譜として扱われてきた当該資料が、関連図譜からの転写や切り取りを多用して編集された存在であることなど、新たに確認された事実も少なくない。因みに、この転写という行為は、写真やコピーがなかった時代、博物研究を進める最大の武器であり、情報を共有化する手段として多用されたようである。さらに、この部分の解明が進めば、近代科学黎明期の学術情報をめぐるネットワークの復元など、さまざまな活用が可能となる。

3. 今後の課題

とはいえ、限られた準備期間では、2万丁に及ぶ全データの調査には至らず、植物や動物・昆虫の画像がはめこまれた箇所(全体の三分の一程度)の部分的なメタデータ作成で時間切れとなった。今後、より高度な資料提供をめざすうえでも、他機関所蔵資料も含めた調査の継続とデジタルデータの追加が不可欠である。その

意味で、今回の企画は、文字通り長い道のりの一歩を踏み出したに過ぎないが、それは如上のように、大変重要な一歩であったと思われるのである。

ところで、実際の展示は、伊藤圭介文庫の特徴を示すことに主眼を置き、「伊藤圭介の人と学問」「圭介をめぐる人間群像」「植物へのまなざし」「描かれた動物 獣・虫・魚」「伊藤圭介と名古屋大学」の五部構成で行われた。また、展示会2日目には、「博物誌の時代と伊藤圭介」と題した講演会がもたれ、120名をこえる参加者が、磯野直秀「日本の博物誌と伊藤圭介」、土井康弘「日本初の理学博士の誕生」、杉山寛行「伊藤圭介と医学」の各講演を熱心に聴講した。個人的な感想ではあるが、自然・環境との共生が喫緊の課題となり、人類の様々な経験に学ぶ必要が指摘される今日にあって、伊藤圭介文庫は、自然と人間の関係史を再考する資料としても、より積極的に活用していく必要を感じた次第である。なお、懸案であった電子展示(暫定版)については、作成したメタデータをもとに、全文検索や樹形図構築などの機能拡張を行うことで、圭介の意識した豊潤な学術世界の探求を試みている。これらについては、展示会図録及びホームページ(<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp>)を参照されたい。

最後になったが、今回の企画にあたっては、後援いただいた各機関、また各講師やWG委員など多数の方々に大変お世話になった。ここに記して謝意にかえたい。とりわけ、名古屋市東山植物園には、資料の借用や情報提供で多大なご協力をいただいた。また、学内では、博物館、大学史資料室との連携により、所蔵資料の活用を図ることができた。今後の企画においては、さらにこうした学内外の連携を強め、教育・研究内容の高度化や生涯学習・総合的学習コンテンツとしての提供など、新たな可能性を追求していくことが求められよう。

(あきやま・まさのり 附属図書館研究開発室助手)

6年目の電子図書館見学ツアー

蒲 生 英 博

電子図書館の進展

Kenneth E. Dowlinが著した“ The electronic library ”(1984)によって、日本でも広く使われだした電子図書館という言葉は、当時の定義では、電子化された図書館機能と電子化された情報とを有機的に統合したものである、とされていました。しかし今日では、インターネットの普及や情報関連技術の発達によって、図書館における電子図書館的機能も進展し、電子図書館が提供する情報も変わってきました。

例えば、1990年代の半ばに、日本各地の大学図書館が所蔵している資料の電子化を始めたころ、多くの大学では、国宝や重要文化財クラスも含めた古文書・古地図などの貴重書を電子化(電子画像化)し、インターネットで公開してきました。国宝の実物に触れる機会のない人にとっては、机の上のパソコンでその一部を見ることができずし、図書館にとっても、資料を保存しつつ公開も進められるという利点はあるのですが、そこから新たな学術的な価値を創出するのはなかなか難しい、ということが分かってきました。

今日、図書館では古文書などを単に電子化するのではなく、どのような付加価値を付けて電子化し公開するべきか、を考えるようになり、利用する人の要求の多様化、質の高度化に対応しようと努めています。

名古屋大学附属図書館においても、時代の要請に応える、より高度な電子図書館化の計画として、ハイブリッドライブラリー構想のもとに、従来の紙を主とする図書館サービスと電子化された情報を扱う図書館サービスとの融合を目指しています。この構想は、附属図書館の電子図書館推進委員会という図書館商議員等により構成された委員会を中心として検討しており、情報収集の一環として、平成10年度から、電子図書館見学ツアーを実施しています。このツアーでは、すでに国内23箇所の大学や研究機関における先進的な電子図書館化の動向を調査し、各種の施策に反映してきました。

次に、今年度の電子図書館見学ツアーで調査してきました、岡山大学、岡山県、岡山市における構想を、電子図書館の一つのモデルとして、ご紹介します。

古文書の電子化による地域貢献、地域連携

平成15年10月31日に、附属図書館の館長、商議員、研究開発室の教官と職員、図書職員の総勢9名で、岡山大学附属図書館を訪問しました。

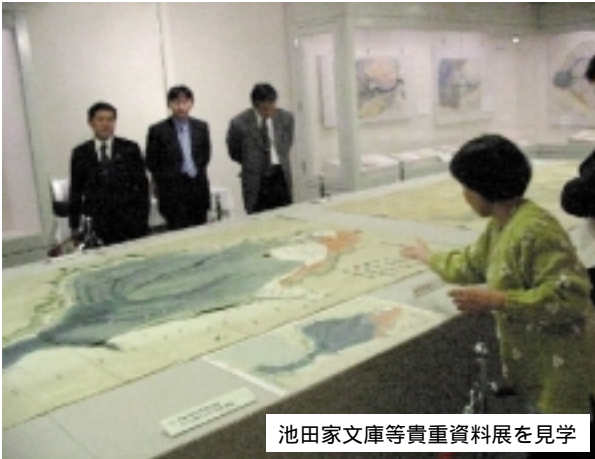
今回の見学ツアーの大きなテーマは、2つあります。1つは、大学や地方自治体の目録情報の横断検索です。これはZ39.50という通信の規則と手順を定めた世界標準のプロトコルを使い、異なったシステムの複数のデータベース間においても、一度の検索で検索結果を一括して得る検索方法です。岡山大学は図書館の電子計算機システムのパッケージのオプションとして導入し、岡山県・市は、旧郵政省のギガビットネットワークに端を発して、独自の横断検索システムからZ39.50へ移行して実現しています。岡山県・市では、県下の全市町村に毎週、資料を搬送する物流網を整備し、この横断検索を利用して、県民が借りたい本の図書館間の枠を越えた予約申込ができるようになっています。

テーマの2つ目は、大学と県・市との古文書のデータベース化による地域連携です。

岡山大学附属図書館では、平成2年度から池田家文庫という、旧岡山藩主であった池田家が所蔵していた藩政資料(古文書、絵図類、和書、漢籍)をマイクロフィルム化して公開し、平成8年度からは電子化を行い、平成14年度までに、絵図類2,700点のうち、2,200点の電子化を終えています。

担当の教官によると、この電子化に際しては、当初と電子化技術、ネットワーク環境などが激変しているため、方針、画像の質の一貫性をどう確保するか、単なる電子化ではなく、資料の効果的な展示のために、事前の調査研究は必要だが、経費に調査研究費は計上できない、

電子化したデータをどのように提供するか(見せ方)、という3点が課題であるとのことで



した。

については、池田家文庫絵図を大学、県・市で共同配信を行う際に、画像閲覧システムとして使用しているソフトウェアのバージョンが異なることにより互換性がなくなり、2つのバージョンのソフトウェアを同時にパソコンにインストールすることができないため、画像閲覧時に若干不便が生じているようです。

に関連しては、経費的な問題から、資料そのものの補修は、現在では最小限必要なものしか行っていない、とのことでしたが、池田家文庫を保存する特殊資料書庫の奥には、貴重書を保存する分厚い扉の特別収蔵庫があり、また独自の燻蒸室まである環境は、とても羨ましいものでした。

については、名古屋大学にとっても参考とすべきことが、多くありました。例えば、大学では、原資料の保存と学術的な利用の両立を考えたデータベース化を実施し公開していますが、県立図書館でも所蔵する池田家文庫絵図などを郷土情報ネットワークとして提供しており、また、平成17年度に開館する岡山市デジタルミュージアムでは、デジタル城下町と名付けて、池田家文庫絵図と立体模型、発掘調査などを組み合わせて、岡山城の城下町を再現したり、現在の町並みとリンクさせて当時の通りを歩くことができる、という構想を練っているとのことでした。

大学、県・市が、池田家文庫という岡山県の歴史的財産を共有しながら、住み分けを図り、それぞれの機関にあった見せ方を工夫をしている点は、電子図書館を利用しての地域連携のあり方として、1つのモデルとなるものです。

また、岡山大学では、岡山県、岡山市と、大学が所蔵する池田家文庫絵図類の電子化に関して、覚書を交わし、撮影の許可、経費、対象資料、撮影方法、インターネット上での公開、印刷、複製及びダウンロードの禁止、人権問題に対する配慮などについて、申し合わせを行っています。

岡山大学としては、今後も広報を進め、総合学習など学校での利用にもつなげ、できるだけ県や市に学術情報の提供をしたい、という希望を持っていました。

今回のツアーは、電子図書館を通しての、大学と自治体との連携について、多くの示唆を与えられたツアーでした。

先進的なハイブリッドライブラリーの構築

Googleなどの検索エンジンを誰もが自在に活用するようになった今日では、図書館が所蔵する資料の電子化は当然のことと考えられ、所蔵資料の電子化だけでは、もはや電子図書館とは言えなくなりました。また、電子図書館的機能が進展するにつれて、電子図書館という言葉自体もあまり使われなくなってきました。

図書館の利用者自身が、インターネットによりコンピュータを制御し、自動化書庫から図書を取り出し、特別な手続きを経ないで図書を借りたり、電子化した資料を学生の自習や授業で活用したり、これらの拡張していく電子図書館的機能を、従来からの図書館サービスとどのように調和・統合させていくかが、今後の大きな課題です。

平成10年度以降、多くの特徴ある電子図書館を見学してきましたが、名古屋大学附属図書館においても、他の大学、研究機関に影響を与えようとする先進的なハイブリッドライブラリーを構築していきたいと考えています。

なお、これまでのツアーの記録は、次のURLにあります。(大学内でしか見ることはできませんが)ぜひ一度、ご覧ください。

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/iinkai/densi/tour/record.html>

(がもう・ひでひろ 情報システム課図書館専門員)

海外の図書館訪問記 その1

当館の「和漢古典籍に関する知識と技術の継承プロジェクトグループ」の活動が、平成15年度国立大学図書館協議会賞を受賞したことを、総長はじめ大学本部からも評価され、6名の図書系職員が海外研修の機会を得ました。各人の成果の一端を、簡単な報告として、数号にわたって本誌上に連載することになりました。

米国のローライブラリーを訪問して

森 由 香

平成15年11月9日～11月15日に、米国の主要なロースクールのローライブラリーを訪問する機会を得ました。

今回の訪問は、大学とのやりとりを自分で言い、自分一人で調査を行わなければならなかったため、あまり自由に英語をあやつることのできない私にとっては、すべてが冒険でした。幸い、訪問前の連絡は、Eメールでスムーズにやりとりができ、先方の対応が速く、しっかりしていることに感心しました。

まず、訪問をしたのは、Harvard University (Boston) のロースクールの図書館です。現地は、11月上旬とはいえ、日本の12月のような寒さで、煉瓦造りのかわいらしい町並みを、緊張しながら大学へ向かいました。ローライブラリーは、ロースクールの建物の中でもひとときわ立派で大きく、いかにも図書館が中心的な存在であるという感じがしました。図書館のスタッフは100人を越え、組織は、図書館の管理部門、レファレンス・閲覧部門、資料の収集・整理部門に分かれていました。それぞれスタッフは非

常に専門化されており、各言語、形態の資料について、それぞれの資料に精通した専門のライブラリアンがいるそうです。例えば、東アジア法の専門のライブラリアンが、東アジアで出版される法律に係る資料について、どんな本を買うのかを選定し、また購入した本の目録を作成しているというように、組織化が責任を持って行われていることを知ることができました。

次に訪問したのは、Yale University (New Heaven) のロースクールの図書館です。建物は中世のお城か修道院のように美しく豪華でした。図書館に入るとすぐに、読書室と呼ばれる広く豪華な部屋がありました。ここには、学生が一学期の間占有できる机があり、学期の間何を勉強するのかテーマを決めて勉強するそうです(写真-1)。書庫に入ると書架はすべて木製で、あたたかみを感じられました。分類は、LCの分類が使われていました。数年前まではオリジナルの分類を使っていたそうですが、付け替えたそうです。特に施設の充実ぶりにため



写真 - 1



写真 - 2

- 報システム課長
- 15.10.30 国立大学図書館協議会理事会（平成15年度第3回）（於：名古屋大学）
出席者：伊藤館長、内藤事務部長、北村情報管理課長、臼井情報サービス課長、郡司情報システム課長
- 15.11.13 第5回国公立大学図書館協力委員会（於：東京大学）
出席者：伊藤館長、内藤事務部長、臼井情報サービス課長
- 15.11.13 平成15年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会（於：国立国会図書館）
出席者：伊藤館長、内藤事務部長、臼井情報サービス課長
- 15.11.20 第6回電子ジャーナル・タスクフォース（於：東京大学）
出席者：伊藤館長、郡司情報システム課長
- 15.11.27～28 第16回国立大学図書館協議会シンポジウム（東地区）（於：一橋大学）
出席者：河合情報システム課図書情報掛長
- 15.12. 2 電子ジャーナルの取扱いに関する担当者会議（於：学術総合センター）
出席者：澄川情報サービス課雑誌掛長
- 15.12. 2 メタデータ担当者会議（於：国立情報学研究所）
出席者：岡本情報連携基盤センター学術電子情報掛長
- 15.12. 8 東海地区国立大学図書館協議会事務連絡会（於：名古屋大学）
出席者：伊藤館長、内藤事務部長、北村情報管理課長、臼井情報サービス課長、郡司情報システム課長、伊藤情報管理課課長補佐、藪本情報サービス課図書館専門員、蒲生情報システム課図書館専門員

3333333333 【学内動向】 <15.10.6 ~ 16.1.5 > 3333333333

会 議

- ・蔵書整備文系小委員会<10.6>
- ・理系図書室連絡会（H15-1）<10.9>
- ・ILL学内連絡会<10.10>
- ・教職教育研究図書コーナー小委員会<10.15>
- ・館燈編集委員会（第15-4回）<10.16>
- ・第5回研究開発室教官会<10.20>
- ・第7回学術情報開発専門委員会<10.20>
- ・図書館システム仕様策定委員会<10.21>
- ・第15-6回学術情報事務会議<10.23>
- ・図書館システム仕様策定委員会<11.4>
- ・第6回研究開発室教官会<11.10>
- ・電子図書館推進委員会（第15-4回）<11.10>
- ・蔵書整備委員会（第15-4回）<11.10>
- ・電子ジャーナル連絡会<11.14>
- ・図書館システム検討委員会（第15-3回）<11.19>
- ・館燈編集委員会（第15-5回）<11.20>
- ・第15-5回附属図書館商議員会<11.25>
 - ・法人化後の附属図書館長の選考規程の制定について
 - ・情報公開法に伴う附属図書館利用規程の取扱いについて
 - ・組織改革検討委員会中間報告に関する提案について
 - ・平成17年度概算要求事項について

- ・第8回学術情報開発専門委員会<11.26>
- ・第15-7回学術情報事務会議<11.27>
- ・第7回研究開発室教官会<12.11>
- ・第1回法人化後の附属図書館の業務・組織等の検討（第二次）ワーキング・グループ会議<12.16>
- ・和漢古典籍整理専門委員会（第15-2回）<12.17>
- ・第15-8回学術情報事務会議<12.19>
- ・第2回法人化後の附属図書館の業務・組織等の検討（第二次）ワーキング・グループ会議<12.25>

行 事

- ・秋季留学生オリエンテーション（於：シンポジオン）<10.8>
- ・留学生ガイダンス（於：附属図書館）<10.8、10.10、10.14>
- ・伊藤圭介生誕200年記念展示会内覧会（於：附属図書館）<10.16>
- ・伊藤圭介生誕200年記念展示会（於：附属図書館）<10.17～30>
- ・伊藤圭介生誕200年記念講演会（於：附属図書館）<10.18>
 - 参加者：119名
- ・セクシュアル・ハラスメント講習会（於：附属図書館）<10.23>
 - 参加者：26名

- ・名古屋栄ライオンズクラブによる留学生用図書贈呈式(於:附属図書館)<10.24>
- ・電子ジャーナル&文献検索データベース講習会(於:附属図書館サテライトラボ)<11.4、11.6、11.7、11.10>
参加者:44名
- ・図書館職員教育プログラム(IT研修)(於:情報メディア教育センター、附属図書館サテライトラボ)<11.20、11.21、11.25~28>
参加者:120名
- ・附属図書館研究開発室第5回懇談会「青木正兒博士と名物学」(於:附属図書館)<12.1>

研修会・講習会等への参加

- ・平成15年度大学図書館等関連事業説明会 - NII Library Week 2003 - (於:名古屋大学)<10.7>
- ・平成15年度漢籍担当職員講習会(初級)(於:京都大学)<10.6~10>
参加者:峯岸ななえ(中)
- ・メタデータ・データベース共同構築事業説明会(於:名古屋大学)<10.7>
- ・STNセミナー(於:メルパルク名古屋)<10.7>
参加者:橋本紀子(中)
- ・情報システム統一研修(平成15年度第3/四半期)第1回情報リテラシーD-2コース(オンライン研修)(於:名古屋大学)<10.7~12.26>
参加者:大塩和彦(中)
- ・第51回日本図書館情報学会研究大会・臨時総会(於:筑波大学)<10.25~26>
参加者:逸村裕助教授(研究開発室)、秋山晶則助手(研究開発室)
- ・三田図書館・情報学会2003年度研究大会(於:慶應義塾大学)<11.8>
参加者:逸村裕助教授(研究開発室)、秋山晶則助手(研究開発室)
- ・第23回西洋社会科学古典資料講習会(於:一橋大学)<11.11~14>
参加者:菊池有里子(経)
- ・平成15年度大学図書館職員講習会(於:大阪大学)<11.11~14>
講師:逸村裕助教授(研究開発室)
参加者:金田志保(教育)、安井裕美子(医)
- ・平成15年度大学図書館職員講習会(於:東京大学)<11.19>
講師:逸村裕助教授(研究開発室)
- ・職員のためのセクシュアル・ハラスメント防止研

- 修会(主任以下の職員等対象)(於:名古屋大学)<11.19>
参加者:前川宏司(中)、鈴木美智子(中)、照井香(中)
- ・平成15年度アジア情報研修(於:国立国会図書館関西館)<11.19~20>
参加者:岡美江(国際)
- ・衛生管理者免許試験受験準備勉強会(於:愛知労働基準協会)<11.20、11.21、11.28>
参加者:伊藤哲谷(中)
- ・平成15年度愛知図書館協会レファレンスサービス研修(於:愛知県図書館他)<11.20、12.3、12.19>
参加者:大嶋寛子(中)
- ・国立情報学研究所公開講演会「問われる情報発信:大学・学術ポータル/機関リポジトリ/メタデータ」(於:キャンパスプラザ京都)<12.5>
参加者:川添真澄(中)、堀木和子(教育)
- ・平成15年度情報セキュリティ講座(国立情報学研究所主催)(於:名古屋大学)<12.9>
参加者:川添真澄(中)、棚橋是之(国際)岡本正貴(情連)、山本哲也(情連)
- ・東海地区大学図書館協議会平成15年度第1回研修会「図書館のサービス・マネジメント:顧客の嗜好と評価」(於:名古屋大学)<12.15>
参加者:73名
- ・Global ILL Framework(GIF)と画像伝送システムの活用研修会(於:京都大学)<12.19>
参加者:森田友久(中)

人物往来

- <はじめまして>-新しく採用になった人-
- ・坂田 亮(情報サービス課閲覧掛)1.1
- ・齋藤 夏来(研究開発室)1.1
- <ご多幸をお祈りします>-退職された人-
- ・石川 寛(研究開発室)12.14
- ・磨田 政明(情報サービス課閲覧掛)12.31

部局動向

- ・法学部図書室:改修工事の終了により法学部研究棟1階に移転<12.26~>

編集委員会

白井克巳(委員長)大澤剛(中)中村香世(中)白神由美子(中)金田志保(教育)近藤悦子(経)安井裕美子(医)澤田さとみ(工)